

ヤスパーズとハイデッガー

Jaspers und Heidegger

松 田 幸 子
Matsuda Sachiko

キーワード：ナチス、ユダヤ人、第二次世界大戦、戦間仲間、
『世界観の心理学』、『存在と時間』

は じ め に

平常の社会では何事もなく続く友情でも、変動の激しい社会ではお互いの立場の違いでむずかしくなることがある。世界的な哲学者ヤスパーズ（Karl Jaspers, 1883～1969）とハイデッガー（Martin Heidegger, 1889～1976）の場合、第二次世界大戦が起こったために二人の友情は非常に複雑で微妙なものになってしまった。

二人が初めて出会ったのは、1920年フライブルク大学のフッサール（Edmund Husserl, 1859～1938）の誕生日のお祝いの席であった。ヤスパーズはハイデッガーのいかにも哲学者らしい語り口にすっかり魅了された。それ以来二人は家族ぐるみの交わりをするようになった。しかしその後1933年にハイデッガーは、ナチスが支配するドイツでフライブルク大学の学長に就任した。他方、ハイデルベルク大学の教授であったヤスパーズは、ユダヤ人の妻を持っていたため、ナチスの反ユダヤ主義によって大学を追われ迫害された。

戦争が終わった1945年には、ヤスパーズはハイデルベルク大学の教授に復帰し、ハイデッガーはフライブルク大学から追放された。

このような二人の交わりをわれわれに教えてくれるものが『ハイデッガー＝ヤスパーズ往復書簡（1920－1963）』である。ここではこの往復書簡を中心として二人の哲学者の関係を考察し、それぞれの人となりについても言及してみることにする。

第1章 ヤスパーズとハイデッガーの出会いと哲学的な交わり

1920年にヤスパーズとハイデッガーは初めて出会ったのであるが、その時すでにヤスパーズはハイデルベルク大学の哲学教授になっていた。ヤスパーズは最初、精神病理学者

として、ハイデルベルク大学の哲学部心理学科の私講師であったが、その後、キルケゴール (S.A.Kierkegaard, 1813 ~ 1855) やニーチェ (F.W.Nietzsche, 1844 ~ 1900) の影響をうけて哲学に転向し、1916年に哲学教授になったのである。そしてハイデッガーに出会う前の年の1919年には、『世界観の心理学』を出版していた。これはヤスパースが心理学から哲学へと転向することになった記念すべき作品であった。他方ハイデッガーは、ヤスパースのその本をすでに読んでいたが、ヤスパースはハイデッガーについては何も知らなかった。当時ハイデッガーはフッサールのもとで講師をしていたが、その後マールブルク大学の員外教授を経て、1928にフッサールの後任としてフライブルク大学の哲学教授に就任した。

二人の往復書簡は1920年から1962年まで続くが、1933年5月にハイデッガーがナチス支配下でフライブルク大学の学長に就任した後に一時途絶えている（正確には1933年8月から35年7月迄である。）その時を境にして手紙の内容ははっきりと変化してきている。1933年以前の手紙では、同じ哲学者としての友情に満ちていた。しかしナチス支配下でハイデッガーが学長に就任した以後の手紙は、以前のようなものではなく、距離をおいた感じのものになってきている。

哲学者としての友情にあふれていた頃の手紙を要約して次に紹介する。

フッサールとハイデッガーのもとで学んだ学生が、学位論文をヤスパースの所に送るから学位を出して欲しいとやってきた時、ヤスパースはハイデッガーにたいして、何故あなたの所では学位を出せないのですかと質問の手紙を出した。これにたいしてハイデッガーからは次のような返事がきた。

「その学生は私（ハイデッガー）の処にも論文を持ってきたので、その論文の不備な点を指摘すると彼は「それなら私はヤスパースの所に行こうと思う」と言っていました。あなたは断ればよいのです。私はこの学期にはすでに四人も放り出しています。」

（往復書簡、1921年1月）

ヤスパースとハイデッガーは、二人で今日自分たちが考えている哲学界のことを話し合いたいと思っていた。

「私の家で私たちが一度、数日間、適当な時間帯に、ともに哲学的に語り合い、そして「戦闘仲間」であることを確証しあい、また強化しあえたならば、それはすばらしいことになるでしょう。……つまり私たちの家で一緒に暮らし、それぞれ自分のしたいことをして、気が向いたときに会って話をするのです。……特に夕方に、あるいはその他随時に、しかも一切の強制なしにです。……旅費は私が出資しましょう。」（同上、1922年9月）

このヤスパースからの提案は、実行され、ハイデッガーはハイデルベルクのヤスパースの家に滞在した。次の手紙はハイデッガーの礼状である。

「あなたのもとで過ごした一週間は、絶えず私とともにあり、追憶から消えません。あの日々の思いもかけぬ面、しかもそれでいて外面的には何事もなかった点、それで私たちに友情が襲ってきたその感傷的でない点、渋みのある進み方、おたがいの側でそれぞれなりの自己確信に伴われた戦闘仲間であるという信念の増大したことにたいして、私はあなたに、心からあの日々の御礼を申します。」(同上、1922年11月)

これにたいしてヤスパーズは次のような返事を出している。

「心から有難う。私たちが一緒に生活したことが、私にとってもどれほど多くのことを意味したか、またどんなに将来の希望を私が持てたかは、あなたにもお分りでしょう。人を信じてよいのだという体験を持てるのは、現代の哲学的荒廃のなかでは素晴らしいことです。……いつかどうしても批判的な雑誌が出現しなければならないというあなたのご意見を、こう解釈しました。つまり、『現代の哲学、マルティン・ハイデッガーとカール・ヤスパーズの批判的小冊子集』がそれです。私たち二人だけがそれに執筆するのです。」

(同上、1922年11月)

このヤスパーズの提案は実現しなかったのであるが、その後も二人は何回かヤスパーズの家で一緒に生活したことがある。時にはハイデッガーは夫人と二人の子供を同伴したこともあった。しかしハイデッガーはヤスパーズに次のような手紙で心のうちを打ちあけていた。

「私は孤独のうちに生きております。私は妻や子供たちと一緒に暮らしてはいますが、それは全く別個の積極的な可能性にとどまります。ところが、男性としては、いづれにしても、戦いの努力をする男性としては、友情こそは、他者から贈ってもらいうる最高の可能性なのです。」

戦闘仲間という私の言葉を、私は、私の孤独のなかから、書きました。……それは現代との対決でした。けれどもほかならぬあの日々以来、私は、ますます非論争的になりました。……正しく仕遂げられた積極的な仕事こそが決定的なものであるということがいよいよ分かってきたからです。そしてそのことを私に自覚させてくださったのも、あなたなのです。」

このあいだのハイデルベルクの日々を、私はあなたに、全く特別の意味で感謝申し上げます。」(1924年4月)

このようにハイデッガーはヤスパーズとの友情に感謝しながら、互いの哲学者として認めあっていた。そして彼はまたヤスパーズの本を教科書に採用し、学生にその本を買わせるために値引きをしてくれるようにとヤスパーズに依頼したこともある。

「学生にあなたの『大学の理念』を読むようにと提案しました。そのために私たちは12冊必要とします。あなたの出版元にそれらの冊数の書物を著者割引で売ってくれないか頼んで頂けませんか。」(1925年12月)

その手紙に続いて一週間後には、本屋が二割引きで売ってくれたことにたいする礼状がヤスパースに届いているので、ヤスパースはハイデッガーの依頼を出版社に取り次いだことがわかる。

手紙からわかることは、ヤスパースとハイデッガーの間ではそれぞれの大学内での秘密事項である人事案件の情報を交換したり、また自分たちの転職の相談なども行っている。さらに、二人が同じ大学で教鞭をとることができればよいという希望も述べあっていた。このようにナチスが政権を握る1933年以前の二人の交友関係は、同じ哲学者として非常に親密なものであった。

さらにハイデッガーは1927年には彼の代表作となる『存在と時間』を出版して、学界に一躍その名を知られるようになった。そしてその翌年の1928年には、フッサールの後をうけてフライブルクの哲学教授となったのである。

第2章 第二次世界大戦中におけるヤスパースとハイデッガーの関係

ヤスパースとハイデッガーの関係は、第二次世界大戦のもとでは非常に微妙なものとなる。特にハイデッガーがフライブルクの学長に就任して以来、二人の関係は哲学者としての関係から別の様相に転化していくのである。

ハイデッガーは1933年4月に学内の選挙で学長に選出されたが、その直後の5月にはナチス(Nationalsozialist, 国家社会主義、1933年に政権の座についた)によって改めて学長に任命され、1934年4月までその職にあった。ナチスの時代には、学長は学内だけで選出されるのではなく文部大臣によって正教授の中から任命されることになっており、任期は決まっていなかった。ハイデッガーの学長としての在任期間はわずか1年にすぎなかったが、この間における彼の発言はナチス寄りのものが多かったという。

ハイデッガーは学長に就任したとき、「大学の自己主張」と題する就任演説を行った。その演説では、大学改革にたいするナチスの見解が述べられており、それは演説自体がナチスの見解に影響を及ぼそうとしたものであった。その要旨は次のようなものであった。

「学長職を引き受けることは、この大学の精神的指導を行うための義務をもつことである。教師と学生がこの精神的指導にたいして服従するということは、ドイツの大学の本質に根を下ろすことによってのみ呼び起され力を持つのである。」

「ドイツの大学は学問によって、ドイツ民族を守る者を教育し陶冶する最高学府なのである。」

すなわち大学は民族共同体の番人、一つの民族の番人を養成する所である。」

「大学のありかたの本質は、ギリシア哲学の中にある。・・・そのギリシア人の学問はたんなる文化的遺産などではなく、民族国家としての現存在全体の最も中心に位置しているものである。」（学長就任演説より、1933年5月）

このようにハイデッガーは、哲学（それも彼独自の哲学）に新しいドイツの現実を打ち立てることの任務を割り当てているのである。しかしこのような大学にたいする彼の考えは、1810年にベルリン大学創立に際してフンボルト（Wilhelm F.von Humboldt, 1767～1835）の言う大学の理念とはまったくかけはなれたものである。フンボルトは、一切の権力から独立した学問の自由、哲学による学問の統一、教授会による大学の自治の三つを大学の理念として掲げ、さらに学問による教養こそが大学の教師と学生にとってもっとも重要であると述べているのである。ハイデッガーの論理は権力に迎合しているものであると言ってよいであろう。

ヤスパーズは彼の学長就任演説を新聞で知り、その後ハイデッガーから送られてきた演説原稿を読んで手紙のなかで次のようにハイデッガーに書き送っている。

「初期ギリシア文化に発端を置かれるあなたの偉大な論考の進め方は、またもや私を、まるで新しい、しかし即座に自明の真理であるかのように、感動させました。あなたはその点でニーチェと一致しています。ただし差異があって、あなたなら、おっしゃることをいつか哲学的に解釈しつつ実現してくれるであろうと、人々が希望してもよいという点が、それです。あなたの講演は、そのことによって、信頼するに足る実質をもっています。」

（往復書簡、1933年8月23日）

このようにヤスパーズは高く評価しておきながら、同じ手紙のなかで次のような批判もしている。ヤスパーズはこの講演の中には少々無理な面があると思われる、また空虚な響きをもっているようないくつかの命題があることなどを指摘している。

このことに関してヤスパーズは30年後に書いたハイデッガーに関する覚え書きには、次のような説明がみられる。

「・・・さらに彼の学長就任講演を、私はなおも出来るだけ善意に解釈しようとした。・・・けれども同時に私は彼をもはや信用しなかった。」（ヤスパーズ『マルチン・ハイデッガーに関する覚え書き』）

このような思いをヤスパーズはもったのであるが、ハイデッガーに宛てた手紙にはこのことは書かれていない。それはこれまでの友人としての二人の関係をこわしたくなかったからであると述べている。

ハイデッガーは学長就任演説で明らかにナチスとその指導者（アドルフ・ヒットラー、Adolf Hitler, 1889～1945）を高く評価している。そのことを証明しているのは、学長就任式には新任のナチスの文教大臣、党幹部および軍部の代表が出席しており、その式次第の中にはブラームスの序曲の演奏、ナチス党の旗の掲揚、党歌の斉唱、ナチス的敬礼、ハイル・ヒットラー（Heil Hitler）と叫ぶことが組み込まれていたという。

また1933年11月フライブルク大学冬期始業式で行った講演「労働者としてのドイツの学生」の中で、ハイデッガーは新しいドイツの学生は労働者となることによってのみ国家と結びつき得るのであって、ナチ国家は労働国家であると言っている。これはナチスの正式な名称である国家社会主義ドイツ労働者党というものを考える時、当然出てくる発言である。それ故ハイデッガーの学長職は最初から国家社会主義革命と一体化していたと考えられる。その後の公式な講演や新聞、党の機関紙、学生新聞などに発表された内容も、ナチスを礼賛していたものであったと言われている。

ハイテッガーは1934年4月に学長職を退いた後もフライブルクの教授をつづけており、その年の秋にはナチスが提案した「大学教官教育」を個々の大学に任せずに中央集権化して実施する方法を自主的に作成してナチスに提案したりしていた。すなわちそれは国家が作る大学教官アカデミーの実施案のことであった。そのことからハイデッガーは学長職を退いてからもなお、アカデミーの指導者の一人として陰で活躍していたことがうかがえるのである。

このようなナチス支配下でのハイデッガーの活躍ぶりとは対照的に、ヤスパースのおかれた状況は悲惨なものであった。ヤスパースは1921年にハイデルベルク大学の哲学の正教授に就任していたが、1937年にはその職を追われ、続いてすべての著作活動も禁止された。それはヤスパース夫人ゲルトルートがユダヤ人であったからである。当時ナチスはユダヤ人の迫害を始めていて、ヤスパースはナチスから夫人を取るか、大学教授の職を取るかと二者択一をせまられていたのである。もちろんヤスパース自身のナチスに対する非協力的な思想も問題視されていたのであるが、ヤスパースは敢然として大学教授の職を投げうってユダヤ人の夫人を守ったのである。

これをきっかけにして国家権力による迫害が強まり、二人の生活を支えていた恩給が何時断たれるかもしれないという不安が、ヤスパースを亡命か自殺かという限界状況にまで追いこんだのである。この頃のヤスパースの苦悩は、当時の彼の日記に詳しく書かれている。その日記（ヤスパース『運命と意志』）を次に少し引用する。

いろんな脅威が明瞭に眼前に思い浮かべられねばならない。今ではもう私たちはほとんど泊めてもらえない——住居を奪われれば私たちは宿無しになる。異民族間の結婚が一般に無効と宣言される場合には私たち夫婦は無力になる——その場合には死あるのみである。

（『運命と意志』、1939年3月17日）

ゲルトルートは自分一人で死にたい、私をも同時に破滅させたくないという考え方を再三

起している。——彼女を苦しめているのは私が死ぬということであって、自分が死ぬということではない。——しかし私は彼女が私を置いて死んでゆくことには耐えられない。彼女を死へと追いやる権力は私をも殺すことになる。私達二人のつながりは絶対的なものである。
(同上、1940 年 11 月 16 日)

私は武器をもってゲルトルトを守ることができないのであるから・・・私は戦うことなしに彼女と一緒に死することになる。彼女を暴力の手に委ねることはできない。
(同上、1942 年 8 月 14 日)

ヤスパースは、ドイツの中で二人を泊めてくれるホテルもないような状態のなかで、世の中から見捨てられながら、1945 年に戦争が終わるまで耐え続けたのである。その頃のエピソードに次のようなことがあった。

ヤスパースが不遇な生活を過ごしていたとき、若い友人から質問を受けたことがあるという。「何故あなたはお書きになるのですか。だって印刷されるあてがないでしょうに」と。これにたいしてヤスパースはにこやかに答えたという。「人にはわかりっこありません。書くことが私の楽しみなのです。書いていると考えていることが自分にははっきりとしてくるのです。それにもう一言いえば、ひょっとして将来革命でも起こったとき、私は手ぶらで突っ立っていたくないのです」(ヤスパース『哲学的自伝』)

ここにヤスパースの哲学者としての面目躍如たる姿を私たちは見ることができる。

ヤスパースとハイデッガーの手紙は、ハイデッガーがナチス政権下で学長に就任して以来、徐々にその内容が変化し、また手紙を出す回数が次第に減少してきた。その頃の手紙ではヤスパースのハイデッガーにたいする批判が目立ち、その反面ハイデッガーからの手紙には、彼の学長就任にたいする弁解の言葉が多くなった。

次に示すヤスパースからの手紙は、二人の間の文通が途絶えがちであった頃、ハイデッガーから論文の別刷りを送ってもらった時の礼状である。このハイデッガーの別刷りには「心からのご挨拶をこめて、M. ハイデッガー、1942 年 10 月」とだけ書かれていたということである。

「私はもはや、私が返事を書くべき相手が誰であるのかを、きちんとまた明確にはしておりません。というのもやがて間もなく十年になる歳月このかた、私たちは、もはやおたがいに会って話をするをしないできているからです。・・・1937 年以來の私の個人的な運命（ハイデルベルク大学教授職追放のこと）についても、また 1937 年と 1938 年 にあなたに送った二冊の書物についても、何のお便りも頂戴しませんでした。・・・あなたのほうからは二つの論文が届いただけです。

これらのすべてのことを私がお便りするというのも、ひとえに、私が当惑してしまうというのを、分かっていたくためにです。」(往復書簡、1942 年 10 月)

ヤスパーズはこのような苦しい思いをしながら、ひたすら出版のあてもない哲学の原稿を書き続けていたのである。

第3章 戦後における二人の関係

1945年5月にドイツが無条件降伏し、ヨーロッパにおける第二次世界大戦が事実上終決したその時を境にして、ヤスパーズとハイデッガーの立場は逆転したのである。ヤスパーズはハイデルベルク大学の教授に復帰し、フライブルク大学の教授だったハイデッガーは停職処分になり、非ナチ化審議の対象者となったのである。当時フライブルク大学には、政治的浄化のための鑑定書を作成するための委員会があり、反ユダヤ主義者としてのハイデッガーの処遇が問題にされていたが、その委員会からヤスパーズにハイデッガーにたいする問い合わせの手紙がきた。それによると、ハイデッガーは、自分は反ユダヤ主義者であったことは一度もなく、このことはヤスパーズが証明してくれる筈であると言っているというのでそれについて返事をして欲しいというものであった。

それについてのヤスパーズの返事は非常に長いものであったが、その主要な点はおおよそ次のようなものであった。

ハイデッガーは1920年代には反ユダヤ主義者ではなかったが、1933年には何かの関連において反ユダヤ主義になったと思われる。

ハイデッガーは私が見るかぎり、ドイツの同時代の哲学者のなかでは並ぶ者のないほど優れた哲学者であるので、彼が著述できるような状態にはしておくことを望む。

ハイデッガーはナチズムに協力した協力した一人であり、彼の思考様式は本質的に自由の要素を欠き、強圧的であった。したがって考えの定まっていない青年の前に立たせるべきではないので、数年間は教授職を停止すべきである。(フライブルク大学浄化処理委員会への返事、1945年12月)

この結果、ハイデッガーは1949年にナチスの同調者とされ、1951年まで教職に就くことを禁止された。

1933年の学長就任と1934年の学長退任のいきさつについて、ハイデッガーが心の内をヤスパーズに語ったのは1950年になってからのことである。それはヤスパーズ夫妻への弁解の言葉から始まっている。

「親愛なるヤスパーズ。私が1933年以来もはや、あなたのお宅にお伺いしなくなった理由は、そこに一人のユダヤ婦人が住んでいらっしゃったからではなく、むしろ、私は単純に自分を恥じたからなのです。それ以来私はあなたのお宅に足を踏み入れなかっただけでなく、ハイデルベルクの町にももはや一度も足を踏み入れることをしませんでした。ハイデルベルク

の町は、ひとえにあなたの友情があるからこそ、その町が私にとってその町でありえているからです。

30年代の終わりに激しい迫害とともに最悪のことが始まったときに、わたしはすぐさまあなたの御夫人のことを考えました。私は当時ハイデルベルク管区の指導部とあの頃親しい関係を持っていた友人を通じて、あなたの御夫人に対しては何の危害も加えられないだろうと確かな保障を得ておりました。けれども不安は残りました。そして自分としては何もできず、全く役に立たないことも分かりました。」（往復書簡、1950年3月）

次の手紙はハイデッガーが学長職を受けたことにたいする弁解である。

「私が学長職を引き受けたと同時に、私は、官職や、さまざまな影響や権力闘争や分裂状態などの機構のどのなかに取り込まれて、我を失って墮落してしまい、たとえ数か月のあいだにすぎなかったとはいえ、私の妻の言葉によれば、権力への陶醉感のなかに落ち込んでしまったのでした。1933年のクリスマス以降になって初めて、私は、より判然と事態を見ることができるようになり始め、その結果、私は二月に異議を表明して学長という私の官職を辞任し、後継者への学長職移譲の儀式にも私は参加することを拒否しました。」

（同上、1950年4月）

ハイデッガーはこのような弁解の手紙をたびたびヤスパースに送った後、彼はヤスパースに一度でいいから会って握手をしたいと願ったが、これはついに実現することはなかった。しかし二人の文通は1969年にヤスパースが死ぬ六年前まで続いていたのである。その内容は1933年以前の友情に満ちたものとはまったく異なっていた。そこでは哲学的な議論もなされることもあったが、二人の考えが一致することは稀であった。たとえばヤスパースはハイデッガーの70歳の誕生日に次のような手紙を出している。

「あなたの70歳の誕生日に、私はあなたに、私からのご挨拶と祝意をお送りします。ご挨拶と祝意は二つながら心をこめたものです。というのも、遠い高貴な過去の追憶のゆえに、今ではもうすでに永く冷え込んで沈黙状態にならざるをえなかったあなたに対する私の個人的感情が、この瞬間に、いつもよりは力強く語り始めたからです。

1933年以来、私たちのあいだには、砂漠が広がってしまいました。その後に起こった事柄や語られた事柄からすれば、この砂漠は、いよいよ通行不可能なものになってゆくばかりのように思えました。公のものとなってしまった事柄のあとでは、あらかじめ公の明瞭な発言なしには、ただ私的に二人が再会しても、私の感ずるところでは、ほとんどなんの役にも立ちえないでしょう。……どうかあなたに、あなたの心を充たす、思慮深い、実り豊かな晩年が叶えられますように、と。」（同上、1959年9月）

ここでは一見おだやかな書き方であるようにみえるが、ヤスパースの『ハイデッガーに関する覚え書き』のなかには、次のような文が見受けられる。

「かつての私は学者の世界にあなたがおられることで勇気づけられました。……しかし私の最初のあらゆる期待に反して、あなたは一つの権力代表者になってしまわれたように思えます。そして私はためらいながら、そしてまたあなたのことが最終的にはどうしてもはっきり分からないままに、私自身のいろいろな活動をとおしてその権力と戦っています。……これまでの私はあなたの著述をほんの断片的にしか知りませんし、たとえ読み始めても、私の栄養にならないために、すぐに止めてしまいました。」『覚え書き』

この文はハイデッガーの70歳の誕生日に出すつもりで書いたが、投函せずに残っていたものを『覚え書き』に収録したものである。これらの手紙を読むと、偉大な二人のドイツの哲学者のあいだに交わされた文章だと思う時、戦争の力の大きさを感じないわけにはいかない。

お わ り に

ヤスパースとハイデッガーは3章の終わりに書いたように、20世紀を代表する哲学者であり、現代の哲学に大きな影響を与え続けているが、この二人の戦争中の立場と態度とは全く対照的である。ヤスパースはユダヤ人の夫人を持っていたこともあって苦難の道を歩まなければならなかったが、ハイデッガーは権力に近づき、逆に戦後は苦しい立場に追いこまれた。しかし彼の代表作である『存在と時間』は実存哲学に貢献した名著であるが、それはナチスが政権を握る前の1927年に書かれたものであるために、彼の哲学者としての明晰さが十分にでしており、今でも多くの哲学者によって評価されている。ハイデッガーはその後にナチスに入党したため、現代の哲学者の間ではいろいろと議論が絶えない。

ヤスパースも実存哲学の確立に大きな寄与をした人であるが、彼の一貫した哲学者としての態度は、現代においても高く評価されている。

この論文を終えるにあたり、私は二人の人柄を示す言葉を書いておきたい。

ヤスパースはハイデッガーを批評して次のように言っている。

「あなたは、ナチズムの諸現象にたいして、まるで子供のごとく振るまったように思えたわけです。その子供は、夢を見ていて、自分が何をしているのかが分からず、まるで盲目のように、……企てに参画するのですが、その企てはその現実の姿とは別様に彼の目には映じており、そのためにその後では彼はやがて瓦礫の山の前に途方に暮れてたたずみ、あとは流され続けるままになると、いうわけです。」(往復書簡、1950年3月)

そのように批評されたハイデッガーはそれを次のようにあっさりと肯定している。

「たとえ数か月のあいだに過ぎなかったとはいえ、私の妻の言葉によれば権力への陶醉感のなかに落ち込んでしまったのでした。」(同上、1950年4月)

この文を読むと二人の性格の相違がよく理解できるような気がする。ヤスパーズは臆病なほど思慮深く、プラトンの『国家』に出てくる「このような時代には風雨のときのように、物陰に身を隠すがよい」という言葉に従って行動していたという。他方ハイデッガーは、哲学者とは思えないほどの速さで政治的活動を行なっているように感じられる。しかし哲学者たる者は、行動に慎重で責任を持たなければならないと私は考えている。

文 献

1. M.Heidegger,Gesamtausgabe,Band 16,Vittorio Iostermann,Frankfurt am Main.
2. W. Biemel und H.Saner,M.Heidegger/K.Jaspers, Briefwechsel,1920-1963, R.Piper GmbH & Co.KG,München,1990. 渡邊二郎訳、ハイデッガー＝ヤスパーズ 往復書簡、1920-1963、名古屋大学出版会、1994。
3. K.Jaspers,Schicksal und Wille,R.Piper & Co.Verlag München,1967. 林田新二訳 カール・ヤスパーズ、運命と意志、自伝的作品、以文社、1972。
4. ヴィクトル・ファリアス著、山本尤訳、ハイデッガーとナチズム、名古屋大学出版会、1997。
5. ハンス・ザーナー著、盛永審一郎・坂本恭子訳、孤独と交わり——ヤスパーズとハイデッガー——晃洋書房、2000。
6. ティモシー・クラーク著、高田樹訳、マルティン・ハイデッガー、青土社、2006。